

安全で安心な学級風土づくりと教師の協働を促進する  
「子どもの社会的スキル横浜プログラム」  
横浜市教育委員会

自治体・団体の概要

横浜市は人口約370万の政令市であり、18区に分かれ多様な地域を抱えている。児童生徒の状況も多様であり、一人一人へのきめ細かな児童・生徒理解、児童・生徒指導が求められている。

○学校数	
小学校	345校
中学校	149校
高等学校	9校
特別支援学校	12校
○児童生徒数	
小学校	190,265名
中学校	79,458名
高等学校	8,113名
特別支援学校	1,453名
○教員数	
小学校	9,666名
中学校	4,831名
高等学校	620名
特別支援学校	923名

(平成24年5月1日現在)

地域の特徴・事業実施の背景

横浜市では、年度による件数のばらつきはあるものの、暴力行為やいじめの発生など、児童・生徒指導上の課題が顕在している。その一因として少子化や核家族化、都市化の進展に伴う人間関係の希薄化等が、年齢相応の社会的スキルを十分に学習する機会を乏しくさせ、社会性や規範意識が未発達なままに成長していることが、その背景となっていると考えられる。

本来、家庭や地域や近隣社会において経験すべき、様々な体験を十分にし得ない社会状況ある子どもたちに、これらの体験（横浜プログラムでいう「被受容体験」「がまん体験」「群れ合い体験」の三基本体験）を学校・学級集団の場で経験させ、社会性を育てていくことを目的とした本市独自のグループアプローチである「子どもの社会的スキル横浜プログラム（以下横浜プログラム）」を平成19年に策定し、推進している。

1 事業の内容等

《指導プログラムの開発》

問題行動等の未然防止、早期発見・早期対応のため、コミュニケーション能力や人間関係を築く力を身につけるためのプログラム及び、発達上の課題を抱えるなど特別な配慮を要する児童 生徒支援のためのプログラムを開発し、平成19年にプログラム集を公開した。その後、平成21年に増補改訂版公開、平成22年に「子から育てる集団づくり51」を出版した。平成24年に、これまでのプログラムのフォーマットを統一し、119編のプログラムを掲載した三訂版を公開した。

《アセスメントツールの開発》

子どもが自己評定する質問紙と、複数の教員で学級及び子どもの状況をアセスメントする学級風土チェックシートの2部から構成された「YPアセスメントシート」を、平成20年に開発・公開した。以降メンテナンスを継続し、平成24年に「YPアセスメントシート ver.5」を公開した。

また、視覚化ツール「Zuzie」を用いて、Y-P アセスメントを「見える化」する「Y-P アセスメント Zuzie 版」を試作し、推進校での試行を行い、実用化を目指している。

## 《研修の実施》

アセスメントにもとづいた効果的なプログラム実践の推進をめざし、研修を実施している。

○4 学校教育事務所で実施する授業づくり講座で、通年の研修を実施

○児童支援専任教諭・生徒指導専任教諭協議会での研修の実施

・児童支援専任教諭新任研修会・生徒指導専任教諭新任研修会での研修

・児童・生徒指導担当教諭区代表者会での研修の実施

○学校からの要請による校内研修の実施

## 2 事業の特徴

### 《横浜プログラムの特徴》

#### (1) 安全で安心な学級風土を醸成する集団指導プログラム

意図的な活動ができるよう119編のプログラムのフォーマットには、ねらい等を明記している。また、子どもたちが安心して参加できるように、共通したポイントを押さえた指導案になっている。

・育てる力、関連スキルを明記し、意図的な活動を展開する。

・「ねらい」「流れ」「ルール」を子ども達に明確に示し、安全・安心が保障された活動にする。

・「個人」→「グループ」→「全体」という基本的な進め方により、誰もが自分の考えをもち、伝えあい、認め合う活動にする。

子どもの社会的スキル横浜プログラム 指導案				育てる力、 関連するスキルを明記	
タイトル (活動概要)	Z1 記憶力お絵かきゲーム (伝える・聴く)			補充する 基本体験	群れ合 い体験
育てる力 関連スキル	「仲間づくり」⑤はっきり伝える ⑫やさしく頼む	背景	グループ活動に慣れないため、分担・協力の苦手な子どもがいる		
活動のねらい	・自分の意見をはっきり伝えたり、友だちの考えをしっかりと聞いたりする力を付ける ・仲間の話に耳を傾けることのよさや、アドバイスを合せて情報を交流させることの楽しさを味わう				
対象学年	小低・小中・小高	実施時期	友だちになれてきたころ		
所要時間	15分	活動場所	学級	活動場面	学級活動
準備	問題にする元の絵 B4くらいの大きさの紙	ねらいの明確化		シッチ	
	学習・活動		支援の観点・留意点等		ルールとねらい
導入	○活動のねらいを知る グループで協力して、見た絵をできるだけ同じように描こう				
主活動	○活動の流れ(やり方・内容)を知る ①最初の1人が廊下に掲示した絵を見に行って、部屋に戻り記憶を頼りに絵をかく ②合図で1番目の人は描くのを止め、2番目の人が絵を見に行って描く ③以降、順々に見に行っては描くリレーをして、絵を完成させる ④できあがった各チームの絵を見合う		流れの明確化 ・事前にグループ分けをしておく ・絵を例示して説明する ・見る時間は統一する		⑤はっきり伝える
	○約束を知る ・次の人に、自分の記憶が足りないところや不確か		活動の基本的な流れ 個人→グループ→集団		⑫やさしく頼む
	ルール ルールの明確化		ることや、分担をして責任をもつ経験を通して、協力の成果を味わえるようにする		

**(2) 複数教員による学級風土チェックと子どもへの質問紙によるアセスメントの2部から構成された「YPアセスメントシート」**

複数教員による学級風土チェックと子どもへの質問紙によるアセスメントを合わせて検討することで、支援の方向性を決め、効果的な指導プログラムを選択する。また、共通の視点（6観点）で学級の子どもの見え方を話し合うことで、教師の主観を鍛え、協働を促進する。

- ・3つのアプローチ、6つの観点、18のスキルから育てたい観点・スキルを特定
- ・学級経営の方向性を検討
- ・指導プログラムの選択
- ・共通の視点で話し合い、教師の主観を鍛え、協働を促進する

**複数の教師で話し合っ行う学級風土チェックシート**

①学級風土チェックシート  
②一人一人の子どもに対する風土チェックシート（複数でも可）

年月	日実施	学年 組	作成者
+	-	6つの観点とその具体	
自分づくり	公正	よいことはよい、悪いことは悪いと言える雰囲気がある 場の雰囲気や人の意見に流されず、自分の意見や感じ方を表明できる	18のスキル
	寛容	失敗や意見の違いを温かく認め、包み込んでいこうとする雰囲気がある 互いのよさや違いを認め、尊重していこうとする	
仲間づくり	自己表現	率直かつ適切な意志の伝達や感情交流がある 友達との明快なコミュニケーションがとれる	⑤はっきり伝える ⑥上手に質問をする ⑦きっぱり断る ⑧仲間に加わる ⑨仲間を誘う ⑩さわやかにあいさつする ⑪自己紹介をする ⑫やさしく頼む ⑬気持ちに共感する ⑭あたたかい言葉をかける ⑮しつかり話を聴く ⑯きちんと謝る
	配慮	思いやりのある言動・行動が自然に現れる 友達の気持ちを推しはかかって行動ができる	
集団づくり	課題遂行	グループの目的や課題解決に意欲をもつ 集団の課題・目標を達成するために話し合いを進めている	⑰問題や課題の解決策をみんなで考える ⑱互いの感情や意見の違いを認めながら調整しようとする
	合意形成	意見や感情の違いを認めながら、集団の意見をまとめようとする みんなの意見を上手に取り入れて話し合いの調整をしている	

**学校生活に関するアンケート**

**「自分づくり」「学級居心地感」に関するA・C項目**

あなた自身について、当てはまると思う答えの数字に○をつけてください。  
14の質問全てに答えてください。

質問	1	2	3	4	5
① わたしは、自分で決めたことは、うまくいっていないことがあっても、最後までがんばります。					
② わたしは、友だちやクラスの人のお世にかまっています。					
③ わたしは、寝まするとき、うまくいっていないのではないかと心配することがあります。					
④ わたしは、自分のことを大切に人だと思っています。					
⑤ わたしは、好きなことがあります。					
⑥ わたしは、いやなことに経験しないで、逃げたしてしまうことがあります。					
⑦ わたしには、いろいろな良いところがあります。					
⑧ わたしががんばって勉強すれば、わたしの成績は、よくなります。					
⑨ わたしは、友だちが嫌いになってしまったことがあります。					
⑩ わたしは、嬉しいようなことも、とにかくあります。					
⑪ わたしは、クラスの友だちと一緒にいると楽しいです。					
⑫ わたしは、クラスの友だちに失敗をしています。					
⑬ わたしは、今のクラスが気に入っています。					
⑭ わたしは、このクラスになって良かったと思っています。					

次のページに進んでください。

**「仲間づくり」「集団づくり」に関するB項目**

学校でのあなたの様子について、あてはまると思う数字の数字に○をつけてください。  
1-2の質問すべてに答えてください。

わたしは・・・

質問	1	2	3	4	5
1. 先生に話しかける					
2. 友達と話す					
3. 先生に質問する					
4. 先生に話しかける					
5. 先生に話しかける					

プロフィール表

学級風土チェックシート

マイペース群

高自己評価群

低自己評価群

対人過敏群

**Y P Menu Ver. 学級風土**

データ入力・表示・印刷    結果表示・印刷

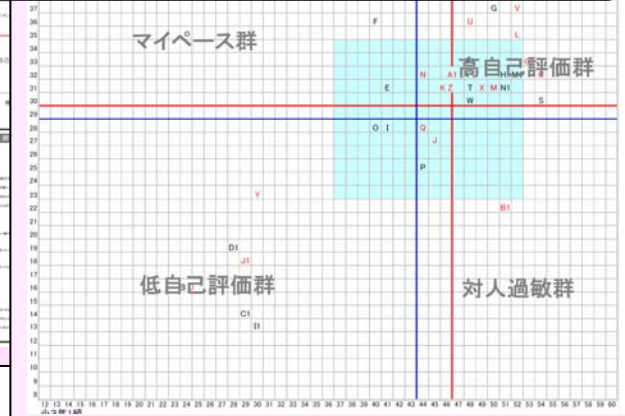
個人シート    各種分析

1 2 3    分布図    分布比較    701表示

学級風土まとめシート    印刷

1 2 3    風土チェック用紙

**Y-Pアセスメントシート(エクセルファイル)に入力すると自動的にアセスメントデータが得られる**



### (3) 教科等の授業に活用できる横浜プログラムのねらいと手法

横浜プログラムのねらいと基本的な進め方は、教科等の授業に取り入れることが可能である。それにより、安全・安心が保障され、誰もが自分の考えをもち、伝えあい、認め合う授業を実現できる。さらには、教科等の授業を通し、学力と社会的スキルの双方を伸ばすことができるようになるのである。

**「社会的スキル横浜プログラム」を取り入れた教科の授業の本時展開例**

**本時目標と本時展開**  
 狩猟採集の生活をしていたころの人々の暮らしの想像図から分かることについて話し合うことを通して、当時の人々の生活の工夫や苦勞に気づくことができる

**本時で高めたい社会的スキル**  
 《自分づくり》 ①自分の意見をもつ ④自他の違いを認める

<b>学習活動</b> ・予想される子どもの反応	<b>高めたいスキル</b>	・指導上の留意点(資) 資料 <b>【評】評価規準</b> (ス) 社会的スキルを高めるための支援・留意点など
<b>《活動のねらいの提示》</b> 大昔の人々は、どんな暮らしをしていたのだろうか？		活動の前に、3つの基本ルール(「暴力NO」「パスOK」「持ち出し禁止」)を確認する
<b>1 狩猟採集の時代の人々の暮らしの想像図を見て、グループのなかで気づいたことを発表し合う</b>		(資) 狩猟採集の時代の人々の暮らしの想像図と道具の写真(教科書〇ページ)を示して、この時間の「ねらい」「流れ」「約束」の説明をする。  (ス) 横浜プログラムの「ナイス! アイディア!」と同じ方法で発表し合うことを伝え、活動に見通しを持たせ、後で読むように指導する。(ス) 活動
<b>《活動の流れの説明》</b> ①話す順番は、リーダーからスタートで時計回り ②大昔の人々の暮らしの絵を見て「すごい」と思ったことや「大変」と思ったことや「意外」に思ったことや「疑問」に思ったことを付箋に書く(3分) ③付箋に書いたことをグループの人に発表して、付箋を画用紙に貼る(貼る場所はどこでもいい)(7分) ……ここまでは「ナイス! アイディア!」と同じ…… ④付箋を仲間分けして、大昔の人々がどんな暮らしをしていたのか、グループで文にまとめて発表する。(まとめ方は後で言います)		
<b>《約束の説明》</b> →話している人が、話しやすくなるべくたくさんの意見を言おう →思いつかないときは「パス」 →どんな意見もOKだけど、「すごい」「大変」「意外」「疑問」 →同じ意見もOK。その時は、「似た意見で…」と言いながら発表しよう		

**横浜プログラムの基本的な進め方**

**3つの明確化**

- ① アイスブレイキング
- ねらいの明確化
- 流れの明確化
- ルールの明確化
- ② 個人での作業・思考
- ③ グループ内での共有化  
(意見を伝える・話を聴く)
- ④ 集団での意志決定  
(仲間と一緒に考える・話し合う)
- ⑤ ふり返り(まとめ)

**ねらいにせまるための約束**

**3つの基本ルールの遵守**

- 嫌なことを言われぬ・されない(暴力NO)
- 参加を強制しない・されない(パスOK)
- ここだけの話(持ち出し禁止)

**子どもの安全・安心が保障された場**

高めたいスキルを指導案に明記する

基本的な進め方を教科の授業に取り入れる  
「3つの明確化」「3つの基本ルール」「個人→グループ→集団」

#### (4) 自己評価の低い群の子どもたちに有効に作用する

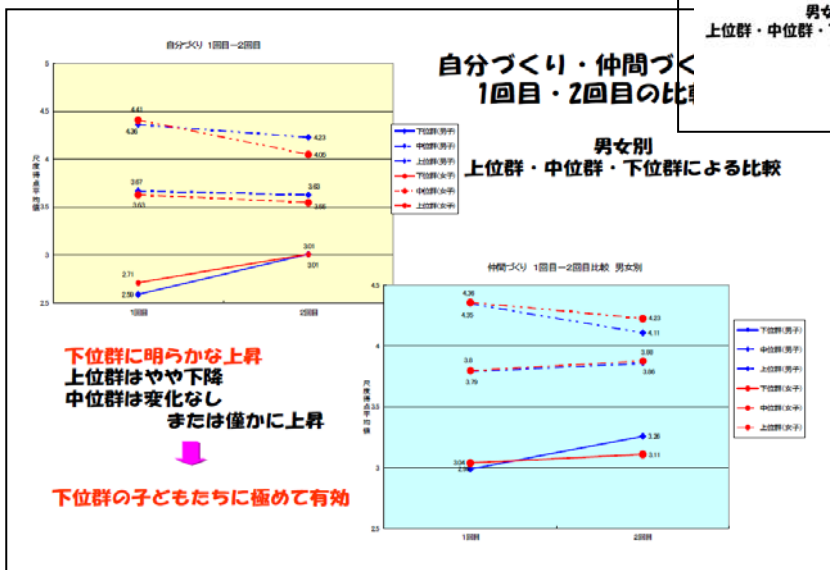
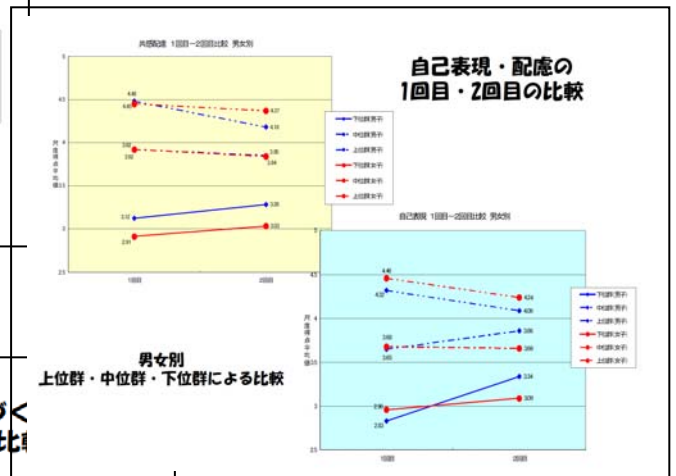
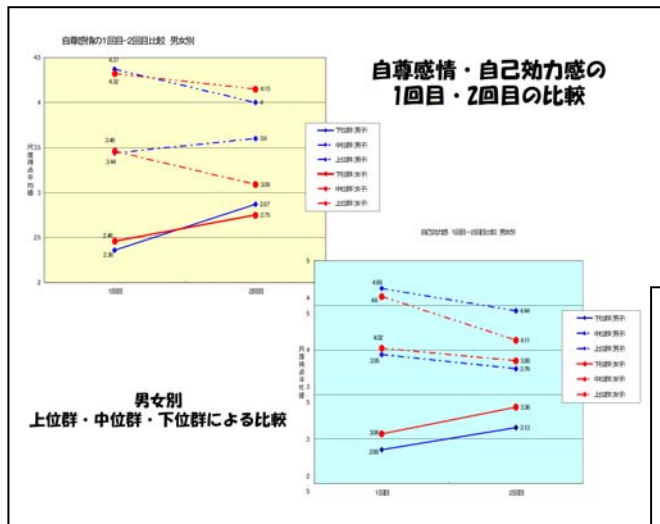
研究推進校（横浜市立A小学校）の取組をY-Pアセスメントで検証したところ、次のような傾向が見られた。

##### ○研究の手続き

- ・ A小学校3年生～6年生 206名
- ・ 通年で横浜プログラム（学級に応じた指導プログラムとY-Pアセスメント）、ユニバーサルデザインの授業研究に取り組む
- ・ 学校生活についてのアンケート実施時期  
1回目：6月      2回目：11月

##### ○検証の手続き

- ・ Y-Pアセスメントデータ1回目と2回目を比較
- ・ 6つの尺度についてそれぞれ上位・中位・下位の3群を取り、比較

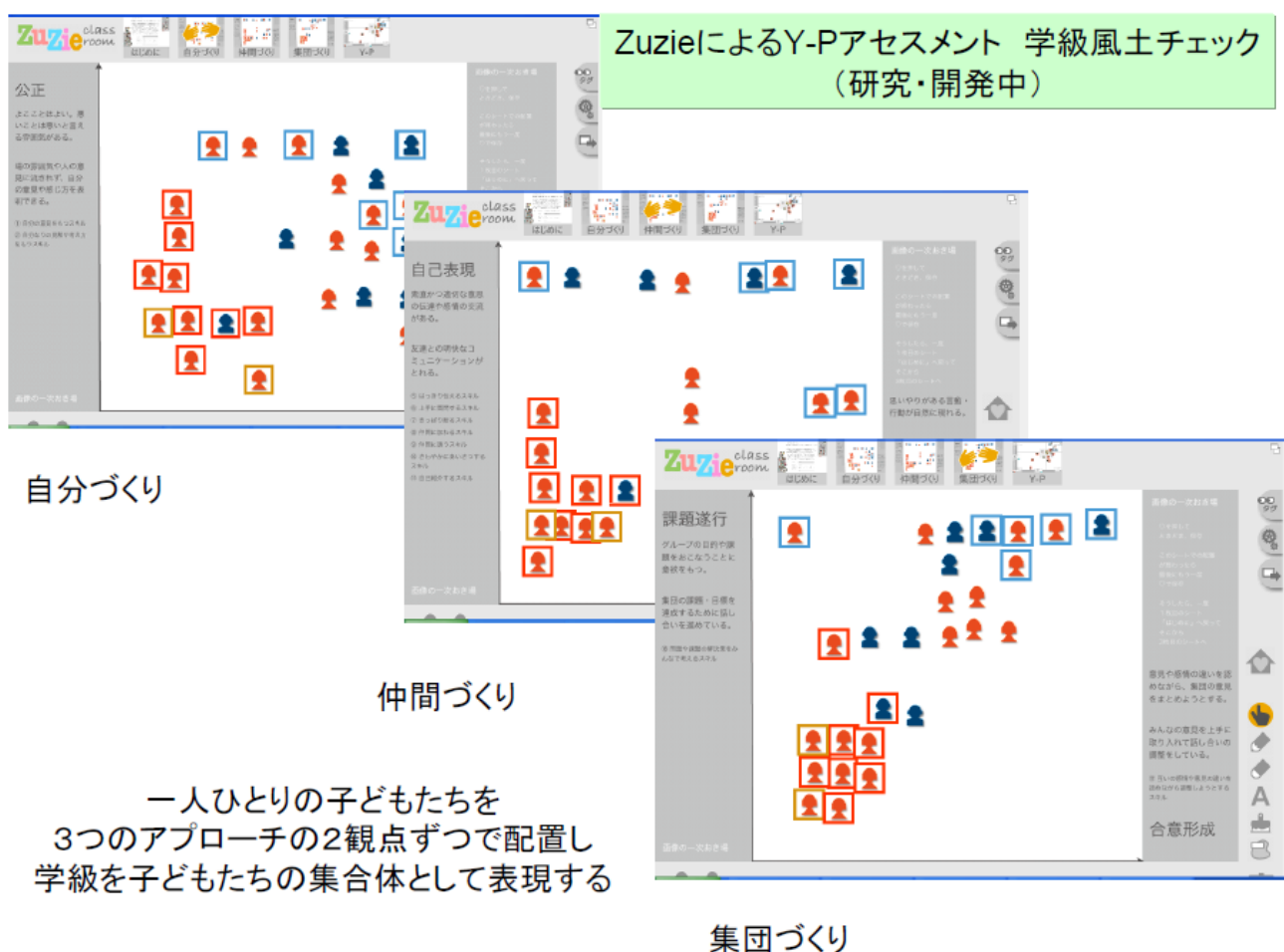


自己評価の低い子どもたちに有効に作用し、自己評価を高めている。

#### (5) Y-Pアセスメントを「見える化」する「Y-Pアセスメント Zuzie版」の試作

視覚化ツール「Zuzie」を用いて、Y-P アセスメントを「見える化」する「Y-P アセスメント Zuzie 版」を試作し、推進校での試行を行い、実用化を目指している。

「Y-P アセスメント Zuzie 版」は、児童生徒一人一人について複数の教師が話し合いながら視覚的にアセスメントを進めることができる。学級風土チェックシートの3つのアプローチ（自分づくり・仲間づくり・集団づくり）について、2つずつの観点（公正・寛容、自己表現・配慮、課題遂行・合意形成）を画面の縦軸・横軸にとり、児童生徒一人一人の顔写真を教員それぞれの観点に従って無段階的に配置する。できあがった図が、観点のいずれの軸により傾いているかを見て、支援の方向性を決めたり、プログラムを選択したりする。また、話し合いを通して、児童生徒一人一人について複数の教師の多面的な理解が交流されることにより、教師の主観を鍛え、教師の協働を促進し、児童生徒へのかかわり方や支援方法等を組織的に共有し具体化するという効果が期待できる。



### 3 事業の成果

本事業は、平成20年度から、文部科学省の「いじめ対策緊急支援総合調査研究」の指定を受け、研究を推進してきた。

平成20年度には、19年度中に既に作成していた横浜プログラム（指導プログラム）に新たな指導プログラムを加える増補改訂を行った。加えて、Y-P アセスメントシートを学校現場で利用しやすくするためにエクセルファイルとして整備し、学校現場でのアセスメントと指導プログラムの一体となった現在の「横浜プログラム」としての形式を整えた。

平成 21 年度には、更なるプログラムの効果的な推進に向けて、横浜プログラムの研究協力校を指定し、Y-P アセスメントを用いて効果測定を行い、プログラムの実施により、自己評価の低い子どもに対し、効果があることが確認された。また、多くの現場の要望にこたえて、株式会社学研教育みらい社から出版するとともに、Y-P アセスメントを含む指導プログラムを市教委ホームページで公開し、成果を還元してきた。

平成 22 年度には、過去 2 年間の研究から、子どもの社会性を効果的に育成するには、プログラムを実施する教員が、共通の指導観や、チームとして協働する意識をもつことが重要であることが明らかになった。その結果、Y-P アセスメントを使った支援検討会をより効果的に行うことができるように、Y-P アセスメントの支援検討会の流れをより明確に示すための研修資料の作成と、Y-P アセスメントの過程を視覚化することによって支援検討会の充実を目指し、研究を進めてきた。

平成 23 年度には、これまでに作成してきた指導プログラムのフォーマットを統一し、プログラムの数が少なかった集団づくりプログラムを新たに加える改訂を行った。また、教師による学級風土チェックを短時間で行うことができる「学級風土チェック簡易版」を作成し、支援検討会への取り組みを容易にした。同時に、複数の協力校からのデータをもとに、Y-P アセスメントシートの改訂及び低学年版の作成を行った。さらに、横浜市教育実践フォーラムや授業づくり講座において、横浜プログラムを活用した小学校社会科の模擬授業を行う等、教科等の授業への活用についての研修を複数回行った。

#### 4 今後の方向性展望

これまでの研究により、指導プログラム及びアセスメントの内容は、より効果的なものとなっている。そこで、今後は、より多くの学校に活用を広げる方向の取り組みが必要であると考えられる。平成 23 年度に行ったアンケート調査によると、横浜市内公立小中学校における横浜プログラムの活用状況は、小学校約 7 割、中学校約 4 割である。より広く活用を推進するため、Y-P アセスメントシート活用ハンドブックの改訂、研修の充実、教科等の授業への活用についての理解促進等、活用しやすい条件整備を進めていくことが必要である。

一方で、研究・開発中の「Y-P アセスメント Zuzie 版」の実用性を高め、学校での活用を可能にしていくことも今後の課題である。